

# 看護学部の学生によるチーム支援型サポートシステムの構築と運用

西田 志穂 岸田 泰子 ケニヨン 充子 荒木 亜紀

## I. はじめに

看護学部では、2021年度に入学生に対して直上の学年が支援する活動を開始した。支援者となる上級学生を「エルダー」と呼称し、上級生によるチーム支援型サポートシステムを「エルダー制」として活動を続けている。

本活動の目的は、主として、新入生が早期に大学生活に慣れ、有意義な学生生活を送れるように支援すること、新入生への学習支援および在学生のリーダーシップ向上の一方法として導入し、双方の学力向上を目指すことである。加えて、看護学部の特色の一つとして位置づけられるような仕組みを作ることである。年次経過とともに段階的にサポートの学年を広げ、最終的には、各学年が直下年次の学年のサポートが行えるように、システム構築を進め、将来的には、高大連携プログラムにもつなげることを視野に入れて活動を行っている。

## II. 2021年度の活動

2021年度のはじめに2年次学生からエルダー希望者を募り、前期教養教育科目の必修科目「基礎ゼミナール」における試行的導入から開始した。4クラス中2クラスで14回授業のうち4回、グループワークが主体の授業回でエルダーが参加した。エルダーは、ファシリテーター役を担い、グループワークにおけるディスカッションの促進を図った。エルダーの参加回は授業に活気がみられ、学生からのフィードバックの内容からも、学生自身の学びや成長を実感している様子が読み取れ、いくつかの効果が想定された（岸田他, 2022）。

そこで、2022年度は、活動の拡大と並行して活動の効果を測定し、特に他者と協働しリーダーシップを発揮する能力を育成することが期待できる人材育成の一助としたいと考えた。

## III. 倫理的配慮

2022年度の活動は、2022年度共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（KWU#22004）。

## IV. 2年次学生エルダーによる1年次学生へのサポート

### 1. 目的

2021年度に引き続き、1年次科目「基礎ゼミナール」においてエルダー活動を取り入れた。上級生からのサポートが1年次学生にどのような効果をもたらしたのかについて、活動報告、および、リアクションペーパーの記述をもとに明らかにたいと考えた。

### 2. 方法

対象となる学生は次の通りで、いずれも活動の趣旨を説明し、同意を得た上で参加した。①エルダーとして2年次学生7名、および、②2022年度科目「基礎ゼミナール」で、エルダー活動の対象となるクラスの1年次学生のうち、同意を得られた43名とした。

対象①のエルダーから提出された活動報告、および、対象②の1年次学生から提出された授業後のリアクションペーパーを分析の対象とした。自由記載のテキストデータの内容を帰納的に分析した。記述内容の経時的变化、あるいは、データ間の共通性や相違点を見出すことを目指した。

### 3. エルダー活動の実際

2022年度の科目「基礎ゼミナール」の第1回、第2回、第3回、第5回、第6回の計5回の授業において、各回4～6名が活動した。具体的には、授業の進行に応じた学生サポート、グループワークのファシリテーションの他、単元に関連した内容に関する自身の体験を語る時間を持った。

各授業回の内容は次の通りであった。

第1回：科目ガイダンス、学内探索（4月20日）

第2回：自己紹介、キャリアデザイン（4月27日）

第3回：大学で学ぶということ（5月11日）

第5回：大学生活におけるルールとマナー（5月25日）

第6回：大学生活とメンタルヘルス（6月1日）

### 4. エルダー活動の結果

#### (1) エルダー活動を行ったクラスの1年次学生にみられた成果

授業回ごとにみられた反応について、リアクションペーパーの記述から次のようにまとめた。

第1回：科目ガイダンス、学内探索（4月20日）

エルダー学生が授業に参加したこと自体を喜んでおり、次回の参加を楽しみにしていた。エルダー学生がグループワークに加わったことにより、具体的なアドバイスの機会を得ていた。また、グループワークでは、積極的にディスカッションし、自身の意見を伝えることの大切さを認識し、この授業以外の機会でも協力してものごとを進めていきたいという意欲につながっていた。

## 第2回：自己紹介、キャリアデザイン（4月27日）

大学生活において能動的かつ主体的に行動することの大切さが多く書かれていた。特に、授業中の態度や、事前学習・事後学習への取り組み方としてイメージしていた。ノートの取り方や資料のまとめ方など、エルダーからの具体的なアドバイスを受けていたが、それをそのまま真似ようとするのではなく、そこから、自分なりの方法を見つけることが重要であることを理解し、自身に合った方法を見つけようとしていた。近い将来には、自身の考えを追求して意見を表出したり、グループワーク等では友人と協力して課題を解決したりしている自身の姿を描いていた。

## 第5回：大学生活におけるルールとマナー（5月25日）

実習を間近に控えた授業であったことから、実習時を想定した思考が多かった。実習をすなわち社会に出ることととらえ、ルールの遵守や時間管理が、他者との関係づくりやコミュニケーションにも重要なことだと意識していた。エルダーからの実体験をもとに、目上の人に対する言葉遣いや、ベッドサイドマナーに気をつけたいという気持ちを強くしていた。

## 第6回：大学生活とメンタルヘルス（6月1日）

人それぞれのストレスコーピングを共有し、それが多種多様であることを理解していた。加えて、同じ行動でも人によってストレスにもなればストレスコーピングにもなることを発見していた。エルダーのアドバイスをもちに、自身のこれまでのコーピング方法を振り返りつつ、これまで意識していなかった行動がコーピング行動であったことにも気づくことができていた。

## (2) エルダーとして活動した2年次学生みみられた成果

相手の立場に立ち、必要とされているサポートをとらえてかかわっていた。グループワーク中で、1年次学生の困りを見つけ、自身の体験をもとにしたアドバイスを行っていた。かつて自身も困っていたことを示し、どのように解決したのかを伝えることが、1年次学生に届く内容となっていた。

加えて、活動の回を重ねる中で、自身の成長を自覚したエルダーもいた。グループワークに入るきっかけをつかめず、1年次学生に助けられた回を経験した学生は、振り返りを行うことで改善策を考え、次の回で活かしていた。この一連の活動によって自信が付き、積極性を身につけられたと実感していた。

## V. 4年次学生エルダーによる下級学生へのサポート

### 1. 目的

1～3年次学生に対して、4年生による相談活動を行い、その効果について明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

対象となる学生は次の通りで、①1～3年次学生28名が相談者として訪れ、②エルダーとして4年次学生9名が対応した。相談後のアンケートの内容から、相談に訪れた理由、相談内容、および、相談後の感想などをまとめた。

## 3. エルダーによる相談活動

1～3年次学生には「先輩と話をしてみませんか？」として、4年生に相談できる機会を設けたことをアナウンスした。開設日と時間帯、予約制で1回30分であること、相談は1人でもグループでも可能であることを示した。相談内容の例として、「大学生生活全般に関すること、臨地実習に関すること、アルバイトと学習の両立の秘訣、就職や進学のための準備など」を示した。教員は相談の場にはいないことや、相談場所は申込み時に連絡することを示し、心理的安全性を担保した。

## 4. エルダー活動の結果

候補日の中でエルダーの対応可能な日程を調整し、2名ずつペアが組める日を選定した。申込みの有無により、結果的に、相談は計18回の設定となった。

エルダー9名が、1回2名ずつペアになって対応し、相談を受けた。相談者の内訳は、3年次学生12名、2年次学生10名、1年次学生6名であった。4年次学生への相談であることから、より近い学年ほど多い傾向があったものの、いずれの学年からのニーズがあることもわかった。相談後のアンケートは9名のみの回収であったが、次のようにまとめることができた。

### (1) 利用の理由

就職活動の内容や4年次のゼミ選択の方法、実習の実際について知りたいというニーズが多かった。加えて、同時に進行するこれらの活動をうまく行っていくための工夫など、4年次学生が取っている方法を知りたいと思っていた。加えて、助産師課程進学に関するニーズもあった。

### (2) 実際に相談してよかったこと

相談者は、個々の相談理由が解決したことのほか、日々の勉強方法や国家試験対策などの具体的なアドバイスを得ることができていた。実習の具体的な進み方や学習のポイントだけでなく、「どうやって乗り越えたか」といった、対面で個別であったからこそ聞くことができる内容も共有していた。

大学院進学に興味がある学生は、実際に受験を目の前にして勉強中のエルダーから話を聞くことで、自身の受験を現実的に考えるようになっていた。また、相談時間そのものが楽しかったことや、親身に相談に応じてもらえたことを感謝していた。

### (3) 相談活動に全体に対する評価

エルダーを2人体制にしたことで、アドバイスに多様性があったことを評価していた。また、相談者のなかには、友人と2人で訪れた学生もあり、相談者と2対2であったことが相談しやすさにも繋がっていた。演習室を使用したことで、落ち着いた環境が提供できたことも評価されていた。満足度は10段階のうち、全員が10と回答しており、十分満足していることがうかがえた。

## VI. まとめ

今回、2022年度に実施したエルダー活動についてまとめた。2021年度の活動をもとに、一定の成果があると思われた、科目「基礎ゼミナール」での活動を継続して行った。グループワークでのかわり、学習者である1年次学生の思考を刺激しただけでなく、反対に1年次学生から刺激を受けており、この活動が相互作用的な効果をもたらしているが示唆された。

2021年度では、後期の1年次科目「課題解決ゼミナール」でも活動し、一定の効果は認められた。それ以上に、1年次学生のみでグループワークを円滑に行うことができ、エルダーの関わりがなくても自立して学習する力を身に着けていると判断し、2022年度は活用対象としなかった。エルダーと科目の適合性を見定めながらの活動が重要である。

正課外でのエルダー活動として、上級学年による相談活動を試行し好評であった。本来のエルダー活動の趣旨からすれば、直上学年による相談活動が望ましいスタイルといえるが、相談者の学年によらず、同様の評価を得ていたことから、今回の取り組みは一定の評価ができるだろう。しかしながら、相談後のアンケートへの回答が少なく、かつ、高評価ばかりであったことから、相談後の満足度が低かった学生が回答していない可能性もある。未回答者への催促等を行い回答率の維持を図ることや、教員からのサポートを提供する機会を持つなど、フォローアップの必要性にも考慮すべき点があったと考える。

エルダー活動は、一部の興味ある学生のボランティア精神を頼りにしたリクルーティングであり、参加や継続の強制ができない。授業時間外の学習に時間を取られる学年や実習が主となる学年では、学業の忙しさからエルダーで活動できる時間の確保が難しくなる。結果、エルダーの人数が十分に確保できないといった課題もある。各学年の学習の特徴を考慮した上で、安定した確保の方策を講じる必要がある。

## VII. 文献

岸田泰子・荒木亜紀・西田志穂・ケニヨン充子(2022)先輩が後輩を支援する「エルダー活動」を基礎ゼミナールに導入した試み.共立女子大学看護学雑誌, 9, 51-56.

# Development and operation of the student support team led by senior students in the faculty of nursing

Shiho Nishida Yasuko Kishida Michiko Kenyon Aki Araki

## Abstract

This report covers two of the Elder's operations from the 2022 fiscal year. The first activity took place within the "Foundation Seminar" first-year course. The elders took part in five different classes, mostly helping groups of students and responding to their inquiries. The activation of group work and the promotion of students' awareness were made possible by the Elders' engagement. The Elders themselves acknowledged personal development. The way in which first-year students as learners and Elders interacted revealed the possibility of mutually supporting one another's development.

The counseling service offered by fourth-year students is the second activity. 29 first- to third-year students used it, and it was well-received overall.

The difficulty in conducting effective assessments stems from the inability to sustain a high enough response rate to post-implementation surveys.